一つの方法です。

若い論文執筆者に対しては、鉄鋼協会提出前に必ず共著者の最終査読を受けることをすすめます。特に企業の執筆者において、図表における初歩的なミス、引用不足あるいは考察不足が目につく場合があります。実績豊富な共著者（上司）の査読を受けていないものと判断せざるを得ない場合があります。本人のレベルアップとむだな査読作業の省略のためにも、鉄鋼協会提出前にぜひ共著者の査読を受けて下さい。

なかには、考察や推敲を不十分なまま投稿しても、校閲者と査読者が査読のうえ詳細な意見を述べてくれるので、一次投稿は不十分なまま投稿し校閲者と査読者の意見を参考にして最終の論文を完成する考え方があるようです。このような考えで安易に論文投稿をおこなうのは絶対避けて下さい。校閲者と査読者は論文の共著者ではありません。

一方、論文としての体裁、考察等に完璧を期すあまり論文投稿までにきわめて長期間を要したり、場合によっては投稿に至らない場合もあります。これを避ける方法の一つは、論文投稿経験豊かな人への相談、および共著者との十分な検討です。共著者は論文に対して等しく責任を持っています。そういう意味でも名前だけの共著者は排除すべきです。

読者の意識の流れを考察した記述をしなさいという指摘をうけたことがあります。これは何かというと論文を読みすすめていったときに、読者が次はどういう図がでてくるだろうか？どういうデータが示されるだろうかと期待しているのに、その期待をうらぎったような図面やデータしか示されていないということに対する指摘でした。投稿前に専門分野以外の人に読んでもらって、自分の論文が読者の期待にかなっているかどうかチェックすることが重要だと思います。

論文の内容を相手に理解して貰うには、自分自身が判りやすい言葉でまず理解し切っていないといけません。この為には何回もの推敲が必要でしょう。この事によって文章の冗長性がなくなると思います。又論文全体の構成、強調すべき点等の配列を良く考えておく事が大切と思います。文章にも十分な演出が必要と思われます。

仕上がったら、文章については誤記がないか、流れは良いかについて、読み合わせで確認してはどうでしょうか。

**4・5　その他**

良い論文を書くためには日頃の訓練が必要であると考えられます。その方法をいくつかご紹介します。

1)論文を書く際に、その研究と直接関係あるなしにかかわらず、世の中でよい論文と言われている過去の優秀論文(例えば俵論文賞受賞論文、頻度高く引用されている論文）を熟読し、その組立て、内容、考察の書き方に関し、まねしてみる。

2)他の論文を校閲、査読の立場で読んでみて、自分の論文の執筆および校閲、査読を受けた際の参考にする。

3)最初の論文執筆では無理と思いますが、二番目の論文は、外国雑誌(なるべく、USA、UKのレベルの高い学協会)に投稿することをすすめます。日本語のあいまいな書き方(表現ではなく、内容）に気がつくと思います。

**5.おわりに**

良い論文を書くには、まず第一に内容が優れている必要がありますが、どんなに内容が優れていても、分かりにくければ正当に評価されません。せっかくの論文が正当に評価されないことは、世の損失でありますし、著者にとっても悔しいことです。一言で言えば、良い論文を書くこつは、読む人を意識して執筆することにあるように思われます。ここで述べました論文執筆上の注意点が少しでも良い論文執筆のお役に立てば幸いです。

# 得・得コーナー

## “一般投稿便利メモ”

「鉄と鋼」に投稿してみたい。1991年末以前に掲載されていた「技術報告」はどうすればよいのか。投稿しなさいと指示を受けたけれど手順がよく分からない。このような希望や不安をお持ちの方は是非ご一読を。必ずお役に立ちます。

**1．どんな記事が一般投稿できるのか？　その規定は？**

「鉄と鋼」誌には著者が自主的に投稿できる記事（一般記事）と協会から依頼されるものとがあります。

投稿者の資格、投稿できる記事等の必要事項は『「鉄と鋼」投稿規定』に、具体的な書き方は『執筆要領』に詳細に説明されています。重要です。これらに則っていなければ、返却されます。

一般投稿できるものは、論文、現場技術報告、寄書及び誌上討論に限られています。内

緒ですが、ISIJ情報ネットワークに投稿希望の記事があれば、協会の編集・業務室に事前に問い合わせてみることをお進めします。優しい女性が丁寧に対応してくれる筈です。

**2.『投稿規定』、『執筆要領』はどこに？**

毎年、12月号の「ISIJ情報ネットワーク」に掲載されています。より魅力ある「鉄と鋼」誌へ改革が意欲的に進められているため、最新号を見ること。ページ数が変わっていたなどと、後悔しないように。

現場技術報告については、「鉄と鋼」誌各号の現場技術報告見出しの裏面に『投稿規定補足（現場技術報告）』と『執筆要領』が掲載されております。短期間で掲載されますし、論文として再投稿できますので、速報の場として利用できます。

**3.「鉄と鋼」誌と「ISIJ International」誌の選択**

「鉄と鋼」誌では「ISIJ International」誌をはじめとして他の刊行物に先に掲載（未来も含め）と判明した時点で査読、印刷準備等の作業は中断され、原稿は返却されます。「鉄と鋼」誌掲載を希望される場合に注意が必要です。

なお、既発表のデータが1/3以下程度であれば新規論文とみなされます。

**4. 審査の基準、手順は？　よい論文とは？**

本誌に「論文執筆者へのメッセージ」として論文査読者により詳しく説明されています。寄書も論文と同様に審査されます。投稿論文が修正、あるいは返却と判定されて送り返され、不愉快になることのないように、上記「メッセージ」を一読後、投稿することをお勧めします。

現場技術報告は、『投稿規定補足（現場技術報告）』に合致しているか否か審査されますが、誤字、脱字、英訳の誤りは題目を除いて著者の責任となります。後で恥ずかしい思いをしないためには、他の方に事前に目を通して戴くのがよいでしょう。

**5. こんな内容ならば「論文」となる！**

「投稿規定」及び上記の「メッセージ」を熟読して論文投稿を躊躇された方、自分の記事は論文となるか悩んでおられる方に、とっておきの査読の裏（査読申し合わせ）をお教えします。

以下の内容も論文となります。

(1) 新しい現象の発見、新しいデータ、測定方法及び装置の開発、理論などを示したもの（例：状態図、活量）

(2) 製造技術、設備技術、管理技術、製品利用技術などに関し、著者による開発や進歩を記述したもので、十分「考察」のなされたもの

さて、「考察」とはどんなものか補足しておきましょう。難しく言えば、論文の目的に沿ったものであり、かつ、新規性と科学的あるいは技術的価値について論究しているものとなりますが、以下の具体例でよく理解できると思います。

(1) 結果から得られる一般的・普遍的結論、現象の因果関係の体系化、などの検討。

(2) 測定データの場合（例：熱力学データ）は、測定精度、従来データとの比較検討、など。

(3) 解析データのみの場合（例：FEM）は、解析手法の新規性、解析結果が従来のものと比較して新しい事実であること、などの検討。

(4) 分析手法の場合は、測定精度、正確さ、検出限界、定量限界、従来データとの比較、など。

(5) 技術開発的論文では、問題提起及び解析と解決策、従来技術に対する優位性、あるいは実用上の意義などの理論的検討、など。

この例から、1991年12月以前の投稿規定にあった「技術報告」は、ほんの僅かな追加で現規定の「論文」となることがお分かり戴けたのではないでしょうか。

**6.「寄書」の活用を！**

「寄書」とはレベルの低いものと思い込んでいる方々が多いのでは。殆ど投稿されないのが現状です。「鉄と鋼」誌では、前述のように論文と同じ査読を行っており、価値ある記事として取り扱っています。新規性をアピールする場、すなわち新技術の報告、研究速報など小論文の掲載に活用されることをお勧めします。投稿時に速報の必要理由を添付すれば、真剣に検討して戴ける筈です。

**7.「よい論文」の投稿を！**

本誌「論文執筆者へのメッセージ」に査読者の方々による“よい論文の書き方”の力作が掲載されていますが、査読でいかに苦労されているか物語っています。

「よくない論文」は従来のように細部の修正指摘まで行わずに、再投稿（返却）と判定するように審査方針が改革されてきています。「メッセージ」を参考に、「よい論文」の執筆に心掛けて戴くことをお願いして、終わります。　（投稿勧誘員　Y. H.）

## 平成5年第126回秋季講演大会募集案内

（詳細はNo. 5をご覧下さい。）

・申込み締切り　　平成5年7月8日（木）
・会期・場所　　平成5年10月16日（土）～18日（月）　名古屋工業大学
・講演申込みにあたって必要な書類（書留にて送付）
①講演申込み書（No. 5掲載）
②講演申込み受理通知はがきと連絡用カード（No. 5掲載）
③1993年の会員証写し
④講演論文原稿
⑤講演論文原稿写し1通

**講演者へのお願い**

①講演者の変更は事前に事務局へご連絡下さい。代講者は共同研究者の中より会員の方に限ります。
②講演者は講演時間帯の20分前までに講演会場に到着願います。
③OHPのみの使用とします。